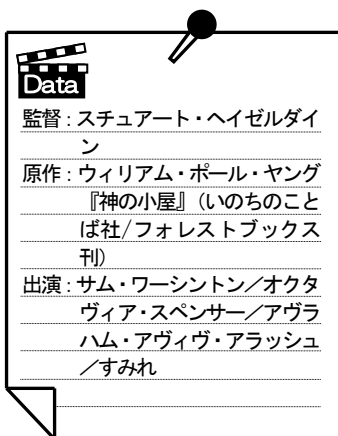




■ショートコメント■

◆『復活 (RISEN)』(16年)は、ローマ帝国100人隊司令官クラヴィスの目からキリストの「復活」を検証するという珍しい試みの映画だった(『シネマルーム38』265頁参照)。そして、私は同作の鑑賞によって、アメリカの大都会NYやLAなどでは見向きもされないが、「バイブルベルト」と呼ばれる、中西部から南東部にかけて、複数の州にまたがる広い地域でプロテスタント、キリスト教原理主義、南部バプテスト連盟、福音派などが熱心に信仰される地域文化の一部になっていること、を知った。ちなみに、これは現在のトランプ大統領の支持基盤になっている白人層だ。

同作は、「心揺さぶるキリスト映画三作品連続公開!!」の第1弾として公開されたもの。『神は死んだのか』(14年)(『シネマルーム35』309頁)、『天国は、ほんとうにある』(14年)(『シネマルーム35』314頁)、『サン・オブ・ゴッド』(14年)(『シネマルーム35』296頁)が次々と公開される中で、そんな企画が実現したらいい。

◆他方、同時期に観た『神様メール』(15年)は、私たち人間にはイエス・キリストが新約聖書で語った全知全能の神様像が定着しているが、本作に見る神様は「意地悪で実に嫌なヤツ!」というテーマ。そして、そのストーリーは、神様のいじめから逃れるべく人間世界に家出したイエスの妹エアが、脱出の際の腹いせ(?)に、すべての人間の余命を知らせる神様メールを送信!それを受け取った人間たちの生き方の劇的変化は如何に・・・?というもので、メチャ面白い映画だった。(『シネマルーム38』271頁参照)

◆そんな2作品に対して本作は、自費出版ながらロコミで“人生を変える作品”として広まり全世界40カ国2200万人が涙した空前のベストセラー『The Shack』(邦題「神の小屋」)を映画化したもの。公式サイトによれば、そのストーリーは次の通りだ。

—愛娘を失い、深い悲しみから抜け出すことができない主人公・マックを演じるのはハリウッドを代表する名優サム・ワーシントン（『アバター』）。そんなマックを救おうと現れた不思議な3人組には、オスカー女優のオクタヴィア・スペンサーとイスラエルで今最も注目を集めるアブラハム・アヴィヴ・アラッシュ。そして、名だたるスターたちと肩をならべ、表現豊かな演技で華々しいハリウッド映画デビューを飾ったすみれ。 —

◆キリスト教における「三位一体」とは、「神と子と聖霊」だが、本作にはその3人（？）が一挙に登場！したがって誰がどんなキャストになり、どんな役割を演じているのかはあなた自身の目で見てもらいたい。そうすれば、きっとあなたも、本作の主人公マック（サム・ワーシントン）と同じように、それぞれが天国の疑似体験ができるはずだ。

『シックス・センス』（99年）の大ヒットで一躍有名になったM・シャマラン監督の映画では、主人公が生きているの？それとも死んでいるの？それが謎のまま展開していくものが多いが、それは本作も同じ。謎の手紙を受け取ったマックは、あの小屋に向かったが、その途中で、かろうじて避けることができた交通事故が発生。しかし、これは本当に避けられていたの？それとも・・・？

◆本作後半はそんなM・シャマラン監督流のそんなミステリー色も含めて、マックの体験をしっかりと吟味したい。もっとも、字幕でも流れるように、それを信じるか信じないかはあなたの自由だが・・・。

2017（平成29）年9月21日記